名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究　第10号　2008年12月

〔学術論文〕

夏目漱石『坊っちゃん』の文字表記と語種
――カタカナの使用法をめぐって――　その１

成　田　徹　男

要旨　本稿では、明治期以降の日本語資料において、カタカナの占める位置は、どのようなものか、ということをみるために、手始めとして夏目漱石の『坊っちゃん』を対象とし、漱石が、『坊っちゃん』という作品の表現手段のひとつとして、カタカナをどうつかったか、あるいはどうつかおうとしたかを考える。全体の構成は次のようである。

0. はじめに

1.『坊っちゃん』のカタカナ表記語

2. 語種と、表記の字種との関係１――外来語の、表記の字種

以下、3. 語種と、表記の字種との関係２――和語の、表記の字種、　4.「笑い」について、　5. 漱石の表記態度、6. おわりに　となる予定である。今回の「その１」では、「2. 語種と、表記の字種との関係１」までとする。

『坊っちゃん』につかわれている、カタカナ表記語の用例は、延べで336語、異なりでは57語であった。「シャツ」がもっとも用例数が多く170例と、全体の約半数であった。これは坊っちゃんの敵役「赤シャツ」の存在による。57語を分類すると、「外来語固有名詞」が「マドンナ、ターナー」など７語、「外来語普通名詞」が「シャツ、ハイカラ、パイプ、ランプ、ウイッチ、テーブル」など２７語、「和語」の「生き物」が「バッタ、ゴルキ、イナゴ、モモンガー」の４語、「和語」の「擬音語」が「アハハハ、ホホホホ」など12語、「和語」の「その他」が７語となった。外来語についてみると、外来語は主としてカタカナ表記されているものの、外来語でありながらカタカナ表記されていない場合があった。また、「シャツ」「ハンケチ」と「襯衣」「手巾」という両様の表記がみられる語もあった。このような表記が存在するのには、それなりの理由が考えられる。

キーワード：文字、表記、カタカナ、語種、表記意識

0. はじめに

現代日本語の表記について、成田・榊原（2004）で、現在の表記規則による（いわばタテマエの）「表記原則」と、実際に話者がもつと思われる「表記戦略」についての仮説を提示した。「表記原則」は、次のようなものである。

＜現代日本語の表記原則＞

規則１：漢語は「漢字」で書け。

規則２：和語は「漢字」または「ひらがな」または「両者の交ぜ書き」で書け。

規則３：外来語は「カタカナ」で書け。

つまり、表記原則では、当該語の語種の認定が前提となっている。しかし、現実にはこの原則に合致しない、和語や漢語のカタカナ表記例が多く見られる。その背景には、語種以外の、語の分類を、表記文字のつかい分けの基準とするような意識があると考え、実例をもとに、次のような表記戦略を仮説として提示した。

＜現代日本語話者の表記戦略（仮説）＞

１．明らかに外来語である語は、カタカナで書け。

２．固有名は、決まった表記があればそれに従え。

３．漢字で書ける語は、漢字で書け。

４．動物、植物、オノマトペ・畳語は、カタカナで書いてもよい。

５．漢字で書けるはずの語で、漢字がわからない、あるいは読みにくいと思われるときは、カタカナで書け（活用語尾はひらがなでよい）。

６．音を明示したい、意味をきわだたせたい、などの表現意図があるときは、カタカナで書け。

７．上記のいずれにもあてはまらない場合は、ひらがなで書け。

表記原則と表記戦略（仮説）との間で明らかな食い違いをみせるのが、カタカナの使用法である。

本稿では、明治期以降の日本語資料において、カタカナの占める位置は、どのようなものか、ということをみるために、手始めとして夏目漱石の『坊っちゃん』を対象とすることにした。そして、漱石が、『坊っちゃん』という作品の表現手段のひとつとして、カタカナをどうつかったか、あるいはどうつかおうとしたかを考えてみたい。全体の構成は次のようである。

＜論文の構成＞

０．はじめに

１．『坊っちゃん』のカタカナ表記語

２．語種と、表記の字種との関係１――外来語の、表記の字種

３．語種と、表記の字種との関係２――和語の、表記の字種

４．「笑い」について

５．漱石の表記態度

６．おわりに

今回の「その１」では、「２．語種と、表記の字種との関係１」までとする。

夏目漱石の『坊っちゃん』は、漱石の初期の代表作であるばかりでなく、今でも広く読まれており、日本の文学作品の代表作のひとつである。1906（明治39）年に雑誌『ホトトギス』に発表され、翌年単行本『鶉籠』に収録されて発行された。

底本には、電子化されたものとして、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）の『坊っちゃん』を用いた（入力：真先芳秋、校正：柳沢成雄、1999年9月13日公開、2004年2月27日修正）。その底本は、「ちくま日本文学全集　夏目漱石」筑摩書房1992（平成4）年1月20日第1刷発行、底本の親本は、「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房1987（昭和62）年10月27日第1刷発行、となっている。以下の本文中にしめす例文は、この青空文庫版による。つかわれている記号については、《　》:ルビ、(例) 坊《ぼ》っちゃん、|:ルビの付く文字列の始まりを特定する記号、(例) 夕方|折戸《おりど》の蔭《かげ》に、[#]:入力者注　主に外字の説明や、傍点の位置の指定、(例) おくれんかな［#「おくれんかな」に傍点］、となっている。

また、本文中に示す例文の所在は、例文の後に漢数字で『坊っちゃん』の章をしめし、さらに、参照した、岩波文庫版『坊っちゃん』1929（昭和4）年7月5日発行、1939（昭和14）年11月1日第18刷発行、のページ数、直筆原稿の原稿番号（漱石自身がつけた丁付け。夏目漱石2007『直筆で読む「坊っちゃん」』集英社による）、青空文庫をもとにした、「ニンテンドーDS」のソフト「DS文学全集」所収の『坊っちゃん』のページ数、を併記してしめす。以上の3文献については、それぞれ、「岩波」「直筆」「DS」と略記する。漱石が用いた原稿用紙は、松屋製の、24字×12行を中央の折りしろをはさんで左右に配したもので、一枚が288字×2の576字詰めである。『坊っちゃん』は149枚なので、85,000字ほどになる。

なお、「名は体をあらわす」ということで、本稿では、文字体系としての「かたかな」は、「カタカナ」、と「カタカナ」で表記している。

1．『坊っちゃん』のカタカナ表記語

1．1．用例数からみたカタカナ表記語のありかた

『坊っちゃん』につかわれている、カタカナ表記されている語（厳密にいえば、後述するように、接辞、あるいは語の一部もふくまれるが、便宜上「語」としておく）の用例は、延べで336語であった。異なりでは57語であり、うち1例のみのものが32語であった。2例以上の25語を表1、1例のみの32語を表2にしめす。便宜上、表2を先に、表1を後にあげる。

表1にみられるように、「シャツ」がもっとも用例数が多く170例と、全体の約半数をしめる。いうまでもなく、これは坊っちゃんの敵役「赤シャツ」の存在による。前に「赤」のつかない「シャツ」は、次の例文（1）の2例のみであるが、これも赤シャツにかかわる部分である。

(1)「あの赤シャツがですか。ひどい奴《やつ》だ。どうもあのシャツはただのシャツじゃないと思ってた。それから？」　七「岩波」81「直筆」80「DS」472

第二位が「マドンナ」で、用例数は29。これも、言わずと知れた登場人物のあだ名である。

聖母マリアを意味するイタリア語に由来する。あだ名つきの主要登場人物のうち、「赤シャツ」と「マドンナ」とだけが表記にカタカナをふくみ、「山嵐」「野だ（いこ）」「狸」「うらなり」などは、カタカナをふくまない。第三位が「バッタ」。語源はよくわからないが和語であると考えられる。宿直時の「そりゃ、イナゴぞな、もし」の一件のところに集中している。

次の「ヶ」は、「1ヶ月」などの「ヶ」である。漢字「箇」の竹かんむりの一部に由来し、カタカナではないけれども、日本語母語話者の多くはカタカナと認識していると思われるので、カタカナ表記例としてとりあげた。2例あった「カ」も、「岩波」「直筆」では「ヶ」であったので、「ヶ」が11例と考えたほうがよい。

以下は10例未満で、「ゴルキ」「ハイカラ」「パイプ」「ターナー」とつづく。「ゴルキ」は、釣りの場面で登場する魚の名称である。「岩波」の小宮豊隆の解説によると、「松山の近海で釣れるのはギゾで、ゴルキではないさうである。ギゾーはフランスの文明史家で、ゴーリキーはロシヤの文學者である。漱石は二つのものをいつのまにか、混同してしまつたのかもしれない」という

表2　カタカナ表記語（1例のみのもの）

語（青空文庫表記）	用例数	語　種	注　　記
エヘヘヘヘ	1	和　語	「えへへへへ」もあり
クロパトキン	1	外来語	
ケット	1	外来語	「毛布」もあり
コスメチック	1	外来語	
ジユ	1	和語	「ジユと音がして」
ステッキ	1	外来語	
ズボン	1	外来語	「ずぼん」もあり
セピヤ	1	外来語	
ダーク	1	外来語	「ダーク一座」
チーン	1	和　語	
ニッケル	1	外来語	
ヴァイオリン	1	外来語	岩波・直筆「ヴイオリン」
ハハハハハ	1	和　語	
ヒュー	1	和　語	
ピュー	1	和　語	
プッシング、ツー、ゼ、フロント	1	外来語	
プラットフォーム	1	外来語	
フランクリン	1	外来語	
フランネル	1	外来語	
フロック	1	外来語	「フロック張る」
フロックコート	1	外来語	
ヘヘヘヘ	1	和　語	ひらがなかカタカナかは不明
ヘボ	1	和　語	「ヘボ絵師」
ベンチ	1	外来語	
ポッケット	1	外来語	
ホテル	1	外来語	「帝国ホテル」
マッチ	1	外来語	「マッチ箱」
モモンガー	1	和　語	
ヤ	1	和　語	形容詞語幹末尾　「早ヤ目」
ラフハエル	1	外来語	
リボン	1	外来語	
ワー	1	和　語	「わあ」もあり

ことであるが、赤シャツの「文學士」という設定に応じた意図的なものかもしれない。「ハイカラ」は、赤シャツとマドンナにかかわる部分、「パイプ」は赤シャツ愛用で、イギリスの画家「ターナー」は、釣りの場面で赤シャツと野だいこの会話に出てくる。

次の（2）のような叙述がある。赤シャツの「片仮名」趣味についてである。外来語の固有名詞のかなりの部分は、このような設定による必然性がある。

表１　カタカナ表記語（２例以上のもの）　用例数順

語（青空文庫表記）	用例数	語　種	注　記
シャツ	170	外来語	うち「赤シャツさん」4、「シャツ」2、他はすべて「赤シャツ」、「襯衣」もあり
マドンナ	29	外来語	うち「～さん」3、「～事件」2
バッタ	27	和　語	
ヶ	9	和　語	「一ヶ月」など
ゴルキ	7	和語？	
ハイカラ	7	外来語	うち「～頭」2、「～野郎」5
パイプ	6	外来語	
ターナー	5	外来語	
アハハハ	4	和　語	
イナゴ	4	和　語	
ホホホホ	4	和　語	
ランプ	4	外来語	「洋燈」もあり
ウイッチ	3	外来語	岩波・直筆「ヰツチ」
テーブル	3	外来語	
イカサマ	2	和　語	「イカサマ師」2、「いかさま師」もあり
カ	2	和　語	「二、三カ所」など、岩波・直筆では「ヶ」
掛ケ合う	2	和　語	
ズック	2	外来語	
ダース	2	外来語	
ダイヤモンド	2	外来語	
チュー	2	和　語	
ナイフ	2	外来語	
ハハハハ	2	和　語	
ハンケチ	2	外来語	「手巾」もあり
ペテン	2	和　語	「ペテン師」2

(2) 一体この赤シャツはわるい癖《くせ》だ。誰《だれ》を捕《つら》まえても片仮名の唐人《とうじん》の名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があったものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力《しゃりき》だか見当がつくものか、少しは遠慮《えんりょ》するがいい。云《い》うならフランクリンの自伝だとかプッシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知ってる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかいう真赤《まっか》な雑誌を学校へ持って来て難有《ありがた》そうに読んでいる。山嵐《やまあらし》に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。

五　「岩波」51「直筆」51「DS」296 － 298

1．2．カタカナ表記語の分類

表1と表2とを合わせて、57語をおおざっぱに分類してみる。「ゴルキ」「ペテン」などは、語源はよくわからないが和語としておく。分類してみると、少なくとも、明らかな漢語はひとつもないことがわかった。

＜カタカナ表記語の分類＞

外来語固有名詞	マドンナ、ターナー、クロパトキン、ダーク（「ダーク一座」）、「プッシング、ツー、ゼ、フロント」、フラングリン、ラフハエル　（7語）
外来語普通名詞	シャツ、ハイカラ、パイプ、ランプ、ウイッチ、テーブル、ズック、ダース、ダイヤモンド、ナイフ、ハンケチ、ケット、コスメチック、ステッキ、ズボン、セピヤ、ニッケル、ヴァイオリン、プラットフォーム、フランネル、フロック、フロックコート、ベンチ、ポッケット、ホテル、マッチ、リボン　（27語）
和語　生き物	バッタ、ゴルキ、イナゴ、モモンガー　（4語）
和語　擬音語	アハハハ、ホホホホ、チュー、ハハハハ、エヘヘヘヘ、ハハハハハ、ジュ、チーン、ヒュー、ピュー、ヘヘヘヘ、ワー　（12語）
和語　その他	ヶ（「一ヶ月」）、イカサマ、カ（「二、三カ所」）、掛ケ合う、ペテン、ヘボ、ヤ（「早ヤ目」）　（7語）

「ダーク一座」は操り人形劇団名、「プッシング、ツー、ゼ、フロント」は書名である。「マドンナ」は、美人のこと、という意味では普通名詞と考えることも可能である。

「外来語普通名詞」には、明治のにおいがするものの、現在でもふつうにつかわれているものが多い。「ウイッチ」（「岩波」「自筆」では「ヰツチ」）は魔女、「ケット」は毛布のことであり、「フロック」は「フロック張る」というかたちでつかわれていて、「フロックコート」を省略したものである。「ヴァイオリン」は、「岩波」「自筆」では「ヴイオリン」と表記されている。

「和語　擬音語」に分類したものは、笑い声、歓声、柱時計の時報の音など、実際に音があるものに限られている。いわゆる擬態語は、カタカナ表記されていない。

「イカサマ（「イカサマ師」）」「ペテン（ペテン師）」」「ヘボ（「ヘボ絵師」）は、対応する一定した漢字表記が思い浮かびにくい。『日本国語大辞典第二版』（小学館）によれば、「イカサマ」という見出し語の表記は「如何様」であるが、「如何様師」という漢字表記は一般的ではなかろうし、「ペテン師」などと並べて赤シャツへの悪口として出てくるので、カタカナ表記がふさわしい。「掛ケ合う」「早ヤ目」は、おそらく江戸時代から明治初期には、ごくふつうに見られた表記ではなかろうか。なお、「一ヶ月」の「ヶ」もふくめて、このような補助的な役割のカタカナは、「直筆」では、原稿用紙の、前後の二文字がそれぞれかかれた二つの枡目の間に、小さくかかれている。ひらがなでも、「江戸っ子」「会津っぽ」（例えば「岩波」108「直筆」105「DS」619）のよ

うな例については、その促音部分が、自筆原稿では、原稿用紙の二つの枡目の間に、小さく「っ」とかかれている。

「直筆」所収の秋山（2007）には、

> 書き癖は、漢字の字体や仮名にも認められるし、書き損じは、例をあげればきりがない。たとえば赤シャツは、大抵「赤シやツ」と書かれる。漱石はどうもカタカナの「ヤ」が苦手と見える。「ダイやモンド」（**41**左1）と書いたり、「セピや色」（**57**右10）と書いて澄ましている。　　　秋山（2007）p.46　ゴシック数字は原稿番号

という指摘がある。実際、赤シャツはすべて「赤シやツ」であったし、「ダイやモンド」「セピや色」も指摘のとおりである。ただし、「早ヤ目」の「ヤ」は、小さいけれどもカタカナにみえた。直筆原稿で唯一のカタカナの「ヤ」ということになる。

2．語種と、表記の字種との関係１——外来語の、表記の字種

2.1．　もっぱら漢字表記されている外来語について

上記のようなカタカナ表記語の例をみると、「外来語はカタカナでかく」という方針があるかのようであるけれども、表1、表2の注記にもあるように、外来語であってもカタカナ表記されていない場合がある。気づいた限りでの語例は、次の表3にしめすようなものである。

表3　カタカナ以外で表記されている外来語

見出し	表　記	数	使用語形	「岩波」	「直筆」
ガス	瓦斯	3	「瓦斯燈」	岩波ルビ「ガスとう」	直筆ルビなし
ガラス	硝子	1	「硝子窓」	岩波ルビ「ガラスまど」	直筆ルビなし
ケット	毛布	3		岩波ルビ「けつと」	直筆ルビなし
ゴム	護謨	1		岩波ルビ「ゴム」	直筆ルビなし
シャツ	襯衣	1		岩波ルビ「しやつ」	直筆ルビ「しやつ」
ズボン	ずぼん	1	「黒ずぼん」	岩波「づぼん」傍点	直筆「づぼん」
テンプラ	天麩羅	19		岩波ルビ「てんぷら」	直筆ルビなし
ハンケチ	手巾	1		岩波ルビ「はんけち」	直筆ルビ「はんけち」
ページ	頁	1		岩波ルビ「ページ」	直筆ルビなし
ランプ	洋燈	2		岩波ルビ「らんぷ」	直筆ルビ「らんぷ」
ロ	露	1	「日露戦争」	岩波ルビ「ろ」	直筆ルビなし
ロシア	露西亜	7		岩波ルビ「ロシア」	直筆ルビなし

このなかで、「瓦斯」「硝子」「護謨」「天麩羅」「頁」「露」「露西亜」については、漢字表記例のみであった。「瓦斯」「護謨」「天麩羅」「露」「露西亜」は、「音訳」、つまり、万葉仮名のように漢字を、語の音形をあらわすためだけに用いたものである。「天麩羅」は、『日本国語大辞典第二版』（小学館）によれば、「一寸外へ出ると天麩羅（テンプラ）や大福餅を買食するか」【滑稽本・浮世床（1813 – 23）初・下】という表記例があり、江戸末にはかなり広くつかわれていたであろう。「露」は、もちろん「露西亜」の頭の字をとったものであり、ここでは「日露戦争」とし

てつかわれている。「硝子」は、『日本国語大辞典第二版』（小学館）によれば、最初は「ビードロ」にあてたもので、18世紀には「ガラス」にあてた表記例がある。「ページ」の「頁」という漢字表記は、『日本国語大辞典第二版』（小学館）では、『坊っちゃん』の例がもっとも古いものとしてあげられている。しかし、「直筆」でふりがながつけられていない。

(3) 実は新聞を見るのも退儀《たいぎ》なんだが、男がこれしきの事に閉口《へこ》たれて仕様があるものかと無理に腹這《はらば》いになって、寝《ね》ながら、二頁を開けてみると驚《おど》ろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。

十一　「岩波」135「直筆」132「DS」777

「直筆」では、「閉口」に「へこ」、「開」に「あ」、「昨日」に「きのう」と、前後で親切なふりがなをつけているのに、「頁」にふりがながないのである。漱石は、読者が当然「ページ」とよむものと考えていたのではないか。ただし、音よみで「ヨウ」とよむ可能性もないではない。「岩波」では「ページ」とカタカナのふりがなつきである。

2.2.　カタカナ表記もある外来語について

「襯衣」「手巾」と「洋燈」は、表1にあるように、複数の、「シャツ」「ハンケチ」「ランプ」というカタカナ表記の用例もある語である。いずれも、「直筆」では、ひらがなのふりがながつけられている点が注目される（「直筆」では、カタカナのふりがなは見あたらない。今野（2007）によると、後に漱石はカタカナのふりがなを使用している）。「襯衣」は赤シャツの登場場面でつかわれている。

(4) 挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙《みょう》に女のような優しい声を出す人だった。もっとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣《しゃつ》を着ている。いくらか薄《うす》い地には相違《そうい》なくっても暑いには極ってる。文学士だけにご苦労千万な服装《なり》をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿《ばか》にしている。

「岩波」20「直筆」19「DS」107-108

意味がわかりやすくなるように、「しゃつ」に「襯衣」と「ふり漢字」をつけた、と考えるとわかりやすい。この記述以後は、もっぱらカタカナ表記の「シャツ」となる。
「手巾」は、次のようにつかわれている。

(5) おれは、じれったくなったから、一番大いに弁じてやろうと思って、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまって、縞《しま》のある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云っている。あの手巾《はんけち》はきっとマドンナから巻き上げたに相違《そうい》ない。　六 「岩波」69「直筆」68「DS」400-401

「絹ハンケチ」というカタカナ表記のすぐあとに、「手巾」と漢字表記し、「はんけち」とふりがなをつけているのである。

「洋燈」の２例は、次の部分にある。

(6)「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニッケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈《らんぷ》を消せ、障子へ二つ坊主頭が写ってはおかしい。狐《きつね》はすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張《いっかんばり》の机の上にあった置き洋燈《らんぷ》をふっと吹きけした。　十一 「岩波」146「直筆」142「DS」837

以上の３語「襯衣」「手巾」「洋燈」は、ふりがながなければ音読みで「シンイ」「シュキン」「ヨウトウ」とよむことが可能である。『日本国語大辞典第二版』（小学館）によれば、「襯衣」には1850年の用例がある（ただし、「肌着」の意）し、「手巾」は10世紀からの用例があがっている（「てぬぐい、てふき」の意）。ランプをあらわす「洋燈」は明治以降の語であるけれども、「洋館」「洋食」「洋服」などの語があるので、「ヨウトウ」とよむのは自然なことであろう。

漱石は、これらを「シンイ」「シュキン」「ヨウトウ」でなく、「しゃつ」「はんけち」「らんぷ」とよませるために、原稿を書きつつだったか推敲の段階で書き加えたかはいざ知らず、ふりがなをつけたわけである。

「毛布」は、次の３例である。カタカナ表記の「ケット」１例とともにしめす。

(7) くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽《あ》きたから、寝られないまでも床《とこ》へはいろうと思って、寝巻に着換《きが》えて、蚊帳《かや》を捲《ま》くって、赤い毛布《けっと》を跳《は》ねのけて、とんと尻持《しりもち》を突《つ》いて、仰向《あおむ》けになった。　四 「岩波」36「直筆」35「DS」205

(8) ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤《のみ》のようでもないからこいつあと驚《おど》ろいて、足を二三度｜毛布《けっと》の中で振《ふ》ってみた。　四 「岩波」37「直筆」36「DS」209

(9) 早速《さっそく》起き上《あが》って、毛布《けっと》をぱっと後ろへ抛《ほう》ると、

蒲団の中から、バッタが五六十飛び出した。　四「岩波」37「直筆」36「DS」210

(10) ケットを被《かぶ》って、鎌倉《かまくら》の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた。　三「岩波」27「直筆」26「DS」150

カタカナ表記の「ケット」の例は、「赤ゲット」に代表される、外套がわりにしたものをさしていると思われる。一方、漢字表記の「毛布」の例は、寝具である。『日本国語大辞典第二版』（小学館）の「もうふ」の項の「語誌」に、次のような説明がある。

明治になって、現在の「毛布」が西洋からもたらされ、はじめは英語由来のブランケット（フランケットとも）が用いられたが、明治一〇年代後半から略してケットと言うようになる。明治時代の書物では、「毛布」に多くケットとルビが付されているが、明治末頃から次第に漢字音のモウフが使われるようになり、現在に至っている。

『坊っちゃん』の舞台となった年代としては、「毛布」の３例を「ケット」とよむのがふさわしいのかもしれない。「岩波」は「けっと」というひらがなのふりがなをつけている。しかし、『坊っちゃん』が執筆された1906（明治39）年３月は、すでに「明治末」であるから、「モウフ」という漢字音のよみかたも広まりつつあったに違いない。「襯衣」「手巾」「洋燈」に「しゃつ」「はんけち」「らんぷ」とふりがなをつけた、漱石の行動から考えると、ふりがなをつけなかったのは、「けっと」ではなく「もうふ」とよむのだ、ということを意味する可能性がある。

「ずぼん」は、外来語がひらがなで表記されている例である。カタカナ表記の「ズボン」の用例とともにしめす。どちらも１例だけである。自筆原稿では、「黒づぼん」「ヅボン」と表記されている。

(11) 隣《とな》りの体操《たいそう》教師は黒ずぼん［#「ずぼん」に傍点］で、ちゃんとかしこまっている。　九「岩波」113「直筆」110「DS」647

(12) うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましょうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンのままかしこまって、一｜盃《ぱい》差し上げた。
九「岩波」115「直筆」113「DS」664

青空文庫でも「岩波」でも、ひらがな表記に傍点をそえているのは、外来語なので本来はカタカナ表記だと編集者が感じたからであろう。すこし後に、カタカナ表記の「ズボン」が出てくるので不統一だと感じられたのかもしれない。『日本国語大辞典第二版』（小学館）の「ずぼん」の項には、『吾輩は猫である』の「づぼん」というひらがな表記例がしめしてある。どうも、漱石自身は、無頓着であったように思われる。「ズボン」が日常のことばとなって、あまり外来語と意識されなくなっていたとも考えられ、興味深い。

【参考文献】

秋山　豊（2007）「自筆原稿を「読む」たのしみ」夏目漱石（2007）集英社　所収

今野真二（2007）『消された漱石　明治の日本語の探し方』笠間書院

夏目漱石（2007）『直筆で読む「坊っちゃん」』集英社（集英社新書ビジュアル版）

成田徹男・榊原浩之（2004）　現代日本語の表記体系と表記戦略　『名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究』第２号　p.41 － 55